

## 「心理測定」から「基礎実験 2」へ（1）

山上 精次

### 「心理測定」

専修大学で心理学を学んだ人たちが、卒業して何年経っても共通の話題となるのが、一つは卒論をまとめるのが大変だったこと、もう一つが今風に言えば「基礎実験 2」、一昔前ならその前身たる「心理測定」が辛かった、ということでしょう。卒業論文は専修大学生田校舎に文学部ができた昭和 42 年(1967 年)、つまり創設以来の文学部全体の伝統であったわけです。文学部創設の際の設立に関わった先生方が高い志で学生を育てようという心意気によってそうなった、と伺っています。

もう一つの「心理測定」も実は、心理学の専門教育が始まった年から始まっています。心理学教室の設立メンバーのお一人であった中谷先生がそのために『心理測定の手引き』というブックレットを作成されています。その序文にあたるところに次のような文章があります。ちょっと長いですが、引用しておきます。

#### 心理学における実験の意味

心理学の研究はただ本を読んだり、机に向かって考え込んだりするものではない。もちろんそれが不必要というのではない。仮説を立てるためにそれは欠かすことができない。仮説が立てられたら実際に調査を行い、あるいは実験を行ってその仮説が正しいかどうか検証するのが科学である。心理学を勉強しようとする人はまず実験や調査の方法、データの分析の仕方について基礎的な勉強が必要である。どんなに興味深い考え方があっても、実験や調査に裏づけられていなければ何の価値もない。心理学のレポートを書く人は科学的なレポートを書くために最低限度心得ていなければならないことがある。

#### 実験のやり方

実験を学ぶときは数人で組を作り、そのうちの 1 人が被験者 (Subject) になり、他の 1 人が実験者 (Experimenter) となる。他に人がいれば、実験者を助ける実験助手、実験記録を取る記録係りの役をすると良い。一人について実験が終わったら、実験者と被験者とは役割を交替する。ただし、集団心理テストなどのときは先生が教示者 (Instructor) となる。

実験は、毎回配布される実験教示書 (インストラクション・ペーパー) の記述事項と指導者の説明によって要領を十分のみこんでから開始する。器具・装置の扱い方はもちろん、実験の進め方について、細かい点まで指導者の

指示に忠実に従うこと。わずかな条件の違いが思わぬ結果の相違をもたらす、他のデータとの比較検討ができなくなることもあるからである。実験に際しては必ずノートを用意し、実験によって得た数値そのほかを記録する。実験結果におよそ関連しそうだと思われること、すべての条件・事項をきれいに書きとめておくことが望ましい。

#### 整理と報告

実験の終了した後に残る重要な課題は実験記録の整理を行い、レポートを書くことである。整理に際しては、多くの場合統計的方法が必要となる。どのようなデータには、どのような統計的方法を用いたら良いかを常に勉強するように心掛けることが望ましい。得られたデータが統計的処理の出来ないものであっては困るので、実験を計画する段階から、統計的な考え方を行い、効率の良いデータを集めなければならないだろう。データ整理を終わったならば、その結果を後述するような要領でまとめ、レポートを作成する。

(中谷和夫、1967)

ちなみにこの頃になされていた実験種目の主なものは次ページの表 1 の通りでした。表の実験種目を見ると極めてオーソドックスなテーマ、指導内容となっています。今日でもこのような構成で初等実験の実験指導を行っている大学が少なからず存在すると思います。これを見ても、心理学教室の創立以来、実験指導が教育の柱として位置づけられ、重視されていたこと、また高いレベルでの教育がなされていたことが分かります。

#### 「心理測定」の姿

私は入職した昭和 54 年(1979 年)から「心理測定」の担当を命じられ、以来延々と指導に当たって今日に至っているわけですが、当時の「心理測定」がどのようなものであったか、思い出すままに書いてみましょう。

#### 組織・スタッフ・実験室

当時の心理学教室は人文学科心理学コースという組織でしたから、毎年の心理学コースの学生数にはいわゆる定数というものはありませんでした。学生は人文学科の 1 年生から 2 年生に進学するときに、哲学、歴史、日本文学、英米文学、地理、心理の 6 コースの中から好みによって自由に進路先を選択することができました。そのため学生数が年毎に変動しました。その変動幅は 60 名弱から 90 名超の間、という大きさでした。それらの学生の実験指導にあたるのは「心理測定」担当の先生 2 名

表1 「心理測定」の主な実験種目と統計課題

実験種目名	主な統計課題	備考
超心理学的事象	二項検定法	サイコロ* <sup>1</sup>
知能テスト	正規分布	田中 B 式知能検査
内田クレペリン検査	$t$ 検定法	
性格テスト (1)	相関係数	パーソナリティインベントリテスト
性格テスト (3)	$\chi^2$ 検定	YG 性格検査
反応時間	直線回帰	ブザーへの単純反応時間
美的評価	一対比較法・順位相関	
動作学習 (1)	マン・ホイットニーの U 検定	鏡映描写
順応水準	マグニチュード推定法	重量感覚
音声反応時間	一元配置分散分析法	
長さの錯視	二元配置分散分析法	ML 錯視
奥行き知覚	$F$ 検定	深径覚計
明暗の融合	$t$ 検定	CFF 測定
文字の認知域	$t$ 検定	タキストスコープ

または3名と実習助手の伊藤博子さんでした。専任教員としては東條正城先生がキャップでボクが補佐、それ以外に高橋淳子先生が参加されたり、あるいは非常勤講師の先生がいらしたり、という風な体制でした。要は最大5名程度のスタッフで2年生全員を教えていたということになります。

60名から90名の人数の学生をこの人数のスタッフで指導するわけですから、一人の先生は2グループの実験グループの指導を担当していました。つまり一つのグループへの実験インストラクションを終えるまでは、もうひとつのグループの学生は先生が教室に来るのを待っている、という風でした。当時はどこの大学でも、大方このような指導風景でした。自分たちが受けてきた実験指導で当たり前のことでしたので、当時の我々も何の疑問も感じることはありませんでした。

人文学科心理学コースの初期の時代には、心理学教室固有の実験室はいわゆる現在のDブロックの1ブロックのみでした。一般教室に、2つの実験グループを集めて指導するので、先生は実験道具（と言っても、鏡映描写装置とかの軽量なものが主体）を抱えて教室に赴く、という風情でした。

#### 出席・レポート

「心理測定」でも出席は厳しくチェックされました。出席は、先に述べた『心理測定の手引き』の最後のページに実験日の一覧表があって、授業の開始時に担当の先生たちが学生の机を回って判子を押していきました。今でも東條先生や高橋先生、それから伊藤さんなどが机をめぐる学生と一言二言言葉を交わしながら、判子を押

している映像をはっきりと思い出することができます。授業の最終日には、ブックレットの最終ページ、先生方の判子が押されたページを切り取らせて提出させ、出席の集計をしていました。学生の中には、集計が終わったら先生たちの判子が押されたページを返して欲しい、1年間の労苦の記念にして自分で持っていきたい、という者が毎年少なからずいたものです。

学生が毎週レポートを書くというのは、当時も今と変わりませんが、しかしいわゆるワープロというものがなく、レポートはすべて手書きでした。毎週、手描きのレポートを書く学生も大変でたでしょうが、必ずしもみんなが読みやすい文字を書くとは限りませんでしたから、読む方も大変でした。しかし学生の文字にはそれぞれに個性がありました。学生の文字の癖と顔、名前、そして内容の良し悪しの4つの情報が強く連合して、学生の全体的な人柄をより良く把握できていたという側面はあります。また当時は毎週のレポートには巻末に「実験の感想」を書かせていたのですが、毎週それを川柳にして提出する学生がいたりして、それはそれでとてもココロのなごむものがありました。

私が入職した当初は、学生が提出したレポートは内容を見て採点はしますが、いわゆる添削は行なっていませんでした。返却時にコメントをつけるということもなく、提出されたものに成績評価だけを行うというものでした。私が学部生時代に受けてきた実験指導授業でも、

\*<sup>1</sup> 初期には念じてサイコロを振らせていたようですが、その後、ESPカードを使用するようになりました。

表2 IRP のテーマ

年度	IRP テーマ
1997	記憶の再生・再認におよぼす要因
1998	記憶の再生・再認におよぼす要因
1999	記憶の再生・再認におよぼす要因または「顔」
2000	「顔」
2001	「顔」「色」
2002	「顔」「色」
2003	「顔」「色」「音楽」
2004	「記憶」「対人認知」
2005	「記憶」「ユーモア・笑い」
2006	「記憶」「対人関係」「ストレス・不安」
2007	「右と左」「男と女」「色と形」
2008	「わかる」「かかわる」「みる」
2009	「顔」「記憶」「対人関係」「判断」
2010	「男と女」「記銘と想起」「右と左」「自己と他者」「五感とところ」
2011	「男と女」「記銘と想起」「右と左」「自己と他者」「五感とところ」
2012	「みる」「まなぶ」「かかわる」
2013	「みる」「まなぶ」「かかわる」

あるいは高橋先生や東條先生さらには伊藤さんがそれぞれに受けてきた実験指導もそのようなものでしたから、当然のことという認識でした。

きっかけが何であったか記憶は定かではありませんが、昭和 57 年(1982 年)頃から、東條先生との相談の結果、単に採点をするだけでなく、毎週出される学生のレポートに朱を入れて返却してみよう、ということになりました。試みにこれをやったところ、学生のレポートのレベルが目に見えて良くなって来ました。毎回の添削指導の結果、誇張ではなく目を疑うばかりの良いレポートが書けるようになって来ました。近頃の学生は日本語が書けないとか、文章が論理的に破綻しているとかをボクたちは評論・非難していたのですが、要するに自分たちがきちんと指導をしていなかっただけなのであって、責められるべきは学生の拙さではなく、指導不行き届きのボクたちであったのです。それ以降、現在に至るまで一貫してレポートは添削すると同時に、返却時には一人ひとりに個別にコメントしながら解説するというやり方を採っています。教育効果はきわめて大きく、学生の実力の向上はまことに顕著なものがありました、一方、

毎週、2 グループ分のレポートに朱を入れる教員の側の大変さは、文字通り地獄の辛さと言えます。火曜日の夜に宴会があったとしても、帰宅後は明け方まで添削をしたものです。添削しても添削してもレポートの山が低くならず、1 つ採点しては残りのレポートの冊数を数えて、あーやっぱり 1 つしか減っていない、という風な思いを毎週毎週積み重ねてきました。この頃から、学生は「心理測定」がますますつらく厳しいというので、「心理測定」を約めた「しんそく」について「しんそく＝地獄」と呼んでいました。つまり、「心理測定」は先生にも地獄、学生にも地獄であったこととなります。

#### 自由研究演習または IRP

当時日本医大にいらした近藤保彦先生が「心理測定」の非常勤講師としていらしていた平成 9 年(1997 年)、「心理測定」に大きな転機が訪れました。一つは、近藤先生の医学部における学生指導のご経験から、何日も締め切りを過ぎたレポートを「遅滞レポート」として(減点はするが)制度的に受け入れているのは変だという指摘を受けました。提出期限を過ぎたものは一切受け付けないのが医学部では当然であるとのスタンスです。もったいなく指摘だと思いましたが、完全に遅滞レポートの受理を無しにするまでは踏み切れず、提出日の提出時刻を過ぎてはいるが、当日の午後 5 時までに提出されたものだけは特例的に「遅滞レポート」として受け付けることでご納得を頂き、この方式が現在まで踏襲されています。

もう一つは、おそらく近藤先生が学習院大学でご経験されたことかと推測しますが、学生グループにやや大きめの研究テーマを与え、それを数週間かけて学生自身で考えさせて実験を行うような実験指導法を提案されました。この点には、私も大いに共鳴しましたので、およそ 4,5 週間かけて少人数で自由研究をやらせる「自由研究演習」という実験指導形態をこの年に始めました。よくよく外国の実験指導などを調べてみると、IRP(Independent Research Project)という形でそれが心理学教育にきっちりと組み込まれていることを知り、ますますこれの教育効果の高さを認識したところで、1997 年以降、これも現在に至るまで専修大学の心理学教育の伝統となって続いています。表 2 は 1997 年以降、どのようなテーマで IRP が行われてきたかの記録です。

#### つづく

紙幅が尽きました。この続きは次号に・・・。